

山本ゼミ



磯谷 尚

実際に仕事と家庭の両立を行っている方のお話を聞くこと、さらに他学部の方とグループワークをすることでさまざまな考え方や価値観があることを知ることができました。ここで得た知識、経験を今後に生かしたいと思います。

伊藤 加奈

ワーク・ライフ・バランスの工夫や考え方は様々であり、自分にあった形を見つけたいことが大切だと感じました。

岩村 浩美

育児に積極的な方々の意見を聞き、ライフスタイルもそれぞれ異なっていて興味深く感じました。ワーク・ライフ・バランスの実現には家族のコミュニケーションや職場の理解が重要だと改めて感じました。

岡部 将大

ワーク・ライフ・バランスといっても人によってさまざま、考え方も違うので、家族、職場をはじめみんながお互いにコミュニケーションをとりながら理解し合い、支え合っていくことが大切だと感じました。

北村 早希

ワークとライフのバランスをとる上で、切り替えを上手く行ったり効率的に仕事をするのが大切だという話を聞いたので、今後意識して生活したいと思いました。

木全 真希

実際にインタビューすることがとても貴重な経験になりました。様々な人のワーク・ライフ・バランスの形を見ることができて、そのような面からも自分の将来について考えてみようと思えるとてもよい機会だったと思います。

鳥飼 尚史

インタビューはワーク・ライフ・バランスに関するとても貴重なお話が聞けて、凄くためになりました。

道下 光瑠

社会一般では女性労働者の負担が大きい、男性はもっと育児に参加すべきなどの話を客観的に聞いていました。実際に話を聞くことで当事者の方の主観性が伴った話を聞くことができ、とても意義のあるいい経験になりました。

山家 彩子

仕事と子育てなどを両立するためには意識的な努力が必要であることを実感しました。また、仕事の充実感がプライベートの充実を実現する活力になると感じました。

奥田ゼミ



遠藤 拓也

実際にインタビューして生の声を聞くことで、ワーク・ライフ・バランスについてより深く考えることができてよかったです。

西村 梨佐

インタビューを通して、実際にどのようなことに苦勞しているのか、またその対応策をどのように取り決めているか、等の具体的なお話を伺えたことが参考になりました。

藤田 真由

1年間、合同ゼミに参加し、インタビューやワーク・ライフ・バランスに関する報告をしてきました。実際にお話を伺う中で、その方が大切にされていること、考え方の核になるようなものを学びました。自分の人生はどうありたいのか、答えを見つけ出すにはエネルギーがとてもしりますが、問い続けられればいつか掴み取れると信じ、頑張っていきたいです。ありがとうございました。

藤矢 純加

仕事は家に持ち込まないし、仕事に家を持ち込まない、両者のはっきりとした線引きによってバランスが維持されています。ネットの発達で仕事が時間と場所を選ばなくなり、便利になりましたが、一方で仕事やプライベートの区切りをつけるのが難しくなっているのかもしれない。ある程度の限度や終わりを、会社や個人々の生活でも設ける意識が大切になってくるのでしょうか。

前原 里帆

浅井さんのお話を聞いて、仕事と趣味の両立も大切なワーク・ライフ・バランスであるということを実感しました。世代や性別により、生活の中で何を重要視しているかが異なっていることが改めて分かり、ワーク・ライフ・バランスを考える上での新たな視点を得ることが出来ました。

三島 由梨乃

就職活動を目前にしている私にとって今回の取り組みは、自分の人生設計に大きな影響を与えるものであったと感じています。多くの方々のインタビューで伺ったことは、自分はどう働いていきたいのか、結婚後どうしていきたいのか、など考える上で非常に参考にしていきたいものばかりでした。自分の思い描くワーク・ライフ・バランスを実現し、輝く社会人になりたいと強く思わせてくれる良い経験ができました。

村松 俊亮

ワーク・ライフ・バランスを達成していくためには、自分の信念や、考え方をしっかりと掲げて行動していくことが必要だと感じました。

和久田 真希

合同ゼミでの活動を通して、働き方に加え、家族の在り方や自分の生き方についても深く考えるようになりました。

# WORK LIFE BALANCE!



## 多様な生き方を求めて

名古屋市立大学  
ワークライフバランス・インタビュー集

山本陽子・奥田伸子 合同ゼミ・ワークライフバランス研究会  
名古屋市立大学男女共同参画推進センター



# WORK LIFE BALANCE!

## 多様な生き方を求めて

名古屋市立大学  
ワークライフバランス・インタビュー集

この小冊子は「ワーク・ライフ・バランス」をキーワードに、教員、大学職員、病院職員の方を対象に行なったインタビュー集です。インタビューと記事の執筆は名古屋市立大学経済学部山本陽子ゼミと人文社会学部奥田伸子ゼミの3年生が合同で行ないました。

ご多忙の中、インタビューのためにお時間を割いていただき、学生たちの質問に丁寧にお答えいただいた6名の方々には深く感謝申し上げます。

本インタビュー集は名古屋市立大学で働く人々の姿や学生に伝えたい思いを記録することを目的としました。ワーク・ライフ・バランスは、性別をとわずすべての人の一生のテーマとの考えがスタート時にありました。そのため、インタビューをお願いする方々に男性を含み、また、幼い子どもを抱えた方だけではなく、子どもが成長した方を含みたいと考えました。

6人の方のインタビューを終え、ワーク・ライフ・バランスとは、仕事と家庭(家事、育児、介護など)のバランスのみならず、仕事、家庭、趣味、地域活動やNPO活動、自己研鑽など生きることですべてへの長期的な時間とエネルギーの配分だということを確認しました。本インタビュー集がワーク・ライフ・バランス概念を幅広く考える上での一助になれば幸いです。

インタビュー集完成までには多くの方のお世話になりました。本研究および報告書の作成は名古屋市立大学特別研究奨励費の助成を受け、実現いたしました。本学の元ワーク・ライフ・バランス相談員木下薫さんはインタビュー対象となった方々の推薦他準備作業を行ってくださいました。人間文化研究科修士課程の柘植みのりさんはすべてのインタビューに同行し学生への助言・指導を行なう一方、インタビュー集の写真をすべて撮影してくれました。関係者のみなさま、本当にありがとうございました。

山本陽子・奥田伸子 合同ゼミ・ワークライフバランス研究会を代表して 奥田 伸子

## INTERVIEW

01



大学病院 副院長・看護部長

平岡 翠さん

P3

02



大学院 医学研究科 研究科長

浅井 清文さん

P4

03



総合情報センター

岩佐 多実子さん

P6

04



大学病院 薬剤部

上野 朋子さん

P7

05



大学院 芸術工学研究科(建築都市領域)  
准教授

ユン ギュヨン  
尹 奎英さん

P8

06



大学院 薬学研究科 講師

築地 仁美さん

P9

## COLUMN

- ワーク・ライフ・バランス実現のために夫婦で大切なこと P5
- 男女の働き方 ～愛知県の特徴から～ P5
- 職場における理解 ～マタハラ・パタハラ～ P10
- 名古屋市の有配偶女性の就業と夫の家事貢献 P10



INTERVIEW

01

平岡 翠さん

大学病院 副病院長・看護部長

Sui Hiraoka



PROFILE

プロフィール

名古屋市立大学病院副病院長・看護部長。看護師をはじめとする病院職員たちが、それぞれの専門性を発揮し、やりがいをもって働ける職場づくりを目指し、病院運営のマネジメントに携わる。3児の母。

看護部長の仕事

病院では、365日24時間高度急性期医療を提供する。看護職は夜勤のある不規則な勤務シフト、そして女性のライフイベントである妊娠、出産、介護など仕事を継続していく上での課題は尽きない。平岡さんはこれらの課題解決を進めるため日々奮闘している。また、最近では増えてきた男性看護師たちの働き方についても、育児休暇取得の要望の実現にはお互いを理解し働く環境を考えていくことが重要だと指摘した。現在はマネジメントがメインの職に就いているが、子育て期には現場の看護師や看護部長として夜勤もしていた。

子育てのスタンス

長女が小学校に上がった時に看護師長になった平岡さん。それまでの夜勤のある生活では、ほとんどご自身の両親や時には同じ保育園に通う親仲間が長女を預かってくれ、長女のおおらかな性格も功を奏し“おとまり”の日を楽しんでいたとのことである。平岡さんは「子どもに「申し訳ない」と思ったことはなく、病院での私の仕事についてよく話していましたし、子どもがいろいろな人のなかで育つのもいいかとも思っていました。子どももいろいろな事を学んでいて、親以外の人との“接し方”も自然と経験したのではないかと思います。お泊りから帰ってくると〇〇ちゃんのおうちのカラーは〇〇が入っていて…とか体験したことや驚いたことなどどんどん話してくれ、そ

の話聞くのも面白かったですね。」という。様々な人からのサポートに感謝しながら子育てをし、そのつながりの中で子どもが育ってきた。平岡さん自身も子どもを通して深い人間関係を築くことができた経験だったという。

可能な限り大切な人たちの時間を過ごす

管理者となり忙しい日々を送ってきた平岡さんだが、「家族との時間も大切にしたい」との思いから、子どもの大きな行事や部活の大会にはほとんど参加してきた。子どもの送り迎えは夫と当番制。当番の日は「お迎え当番」バッヂを病棟のボードに貼り、他のスタッフにもわかるようにしていた。しかし、仕事が終わらず近所の人にお迎えを頼むこともあった。「普段は迎えに行けないような時はなんとか都合をつけて行く。時間には限りがあるので自分自身で仕事をしながらも大切にしたいことを日々選択していました。」という。以前、施設に入所していた母親に会うために週に2回は仕事の折り合いをつけていた様に、自分に可能な限り大切な人たちの時間を過ごすようにしているという。こういった自分自身の経験も患者さんに真摯に向き合う看護に繋がっていて「人生に無駄な経験など何もないですね。」と話してくれた。



平岡さんも企画に携わった小児科エレベーターホール。

INTERVIEW

02

浅井 清文さん

大学院 医学研究科 研究科長

Kiyofumi Asai



PROFILE

プロフィール

名古屋市立大学大学院医学研究科の研究科長。研究分野は神経組織の中のグリア細胞。2児の父(子どもはすでに成人された)。

研究科長と研究者として

浅井さんは現在医学部・医学研究科長として医学研究科のマネジメントに携わっている。ご研究は神経細胞を支えるグリア細胞の重要性を解明することがテーマである。大学のマネジメントをする前は、4割から5割は自分の研究に時間をあてることができたが、現在は7割から8割の時間をマネジメントに費やすという多忙な日々を送っている。

家庭での協力の必要性

浅井さんご夫婦は妻が小児科勤務で共働きであったため、家事育児の分担が仕事と家庭を両立するための鍵となったという。子どもが幼い時には主に妻が子育ての中心となっていたが、妻が当直の時は浅井さんが主体となって子どもの世話をした。早く仕事を切り上げて子どもを保育園に迎えに行き、妻が準備しておいた離乳食を温め、お風呂に入れて寝かせることもしていたそうである。また、妻が食事の下ごしらえや指示書を準備してから出かけ、浅井さんが指示書を見て子ども達の世話や家事をこなす、という分担もしていた。この他にも、勤務が大変だった時には、夫婦のルールとして企業でいうところの「ノー残業デー」を作り、少しでも家庭に時間をまわせるような取り組みもしていたそうだ。このように浅井さんが家事育児をしやすいように妻が協力してくれていたおかげで、「どうにか家庭と仕事の両立ができた。」と語る。

仕事と趣味の

ワーク・ライフ・バランス

育児を終えた浅井さんにとってのワーク・ライフ・バランスは、仕事と趣味の両立である。ランニングや写真、自作パソコンの組み立てなど多方面での趣味を持っている。今は主にランニングに力を入れており、月に1回程度マラソンにも参加している。医学研究科長として業務が忙しい中でも、自分の中で仕事と趣味の時間を区切り、メリハリをつけているという。「意識的に時間を作らないと趣味を充実させることは難しい。」と話してくれた。

病児保育の必要性

「今後は病児保育の更なる拡充が必要になってくる。」と浅井さんはいう。女性医師を含めて、育児をしやすい環境が整ってきているものの、子どもが急に病気になってしまった時に、熱がある子どもを預かってくれる保育園は少ない。小児科医院などに熱のある子どもを預かってくれる場所を作ることで、急に職場を離れられない時の大きな負担が解消される。医療従事者という立場から見ると、このような病児保育の環境が整うことで、女性が働きやすい環境ができるのではないかと浅井さんは考えている。



趣味の自作パソコンを紹介。



研究室で使われている実験器具。



## ワーク・ライフ・バランス実現のために夫婦で大切なこと

インタビュー集作成にあたって多くの方にインタビューをさせていただいたが、どの方もワーク・ライフ・バランスを実現するためには、「夫婦でのコミュニケーション」が大切であると話されていた。

夫婦間のコミュニケーションに関して、アニヴェルセル株式会社が2016年に全国の20代～30代の既婚男女600名に『『夫婦円満』の秘訣とは?』と聞いたアンケート調査の結果がある。

●配偶者と良い関係(いい夫婦)でいる為に普段気を付けていることは何ですか。

男性	女性
1位 コミュニケーションを多くとる 50.0%	1位 「ありがとう」など感謝の気持ちを伝える 62.0%
2位 「ありがとう」など感謝の気持ちを伝える 42.7%	2位 思いやりを持つ 57.7%
2位 家事分担 42.7%	3位 コミュニケーションを多くとる 56.3%
4位 休日は家族の時間を大切にす 42.3%	4位 休日は家族の時間を大切にす 46.7%
5位 思いやりを持つ 36.3%	4位 「ごめんね」と素直に言える 46.7%

〈出典〉アニヴェルセル株式会社 <http://www.anniversaire.co.jp/brand/pr/soken1/report36.html> (2017年2月参照)

男女ともコミュニケーションに関しての内容が上位を占めている。近年、女性の社会進出に伴い、家庭での男女の役割も変化している。2016年に話題になったドラマ『逃げるは恥だが役に立つ』は、男女が「雇用主と従業員」として契約結婚するという特殊な形ではあるが、お互いにコミュニケーションをとりながら、助け合い、思いやることで良い関係を築くことができるというストーリー

になっていた。「男性は仕事、女性は家事」という考え方にとらわれず、できることはお互いにやることがより良いワーク・ライフ・バランスへのカギであり、そのためにはインタビューに応じてくださった方々の多くが心がけていたように、毎日少しでも会話できる時間を作ることが大事だと考える。

岩村浩美・遠藤拓也・岡部将大・藤矢純加・村松俊亮・山家彩子

## 男女の働き方 ～愛知県の特徴から～

インタビューを通じて、男女の働き方には地域差が生じていることがわかった。愛知県の働き方の特徴と、それを裏付けると考えられる要因について考えてみる。第一に、性別役割分業観から特徴を考える。内閣府の調査によると「自分の家庭の理想は、『夫が外で働き、妻が家を守る』ことだ」という考えに対して賛成寄りの意を示したのは、東京都は43.8%であったのに対し、愛知県は47.8%であった。中でもこの考え方に賛同する男性は全国平均では44.4%、東京都は42.1%であったが、愛知県は49.5%と比較的高い割合であった。愛知県は自動車産業が盛んであり、それに従事する夫の収入が比較的安定しているために、性別役割分業観が他地域に比べやや強い傾向が見られるといわれている。

第二に、産業構造と従事者割合から考えていく。平成22年の「国勢調査」(総務省)によると、愛知県は第一次産業従事者が

2.4%、第二次産業従事者は35.0%、第三次産業従事者は62.7%であり、第二次産業従事者割合は全国1位である。一方、愛知県は第二次産業が強いものの、それに従事する女性の割合は全国平均を下回っているという指摘もある。日本政策投資銀行の調査では、製造業の雇用者に占める女性比率は全国では30.2%であったのに対し、愛知県は25.6%であった。このことから、愛知県は製造業において女性の力を十分に活用できていない状況がうかがえる。

愛知県は、産業構造の影響もあるためか、性別役割分業観がはっきりしている部分もある。しかし、その一方で、活発な第二次産業において、女性の力を十分に投入していないため、今後は理工系の女性の活躍の場を増やすことが求められるのではないだろうか。

〈参考〉内閣府男女共同参画局「地域における女性の活躍に関する意識調査」(2015) [http://www.gender.go.jp/research/kenkyu/pdf/chiiki\\_zenhan.pdf](http://www.gender.go.jp/research/kenkyu/pdf/chiiki_zenhan.pdf) (2017年2月参照)  
愛知県県民生活部統計課「平成22年国勢調査 産業等基本集計結果(愛知県分)」(2014) <http://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/38011.pdf>  
日本政策投資銀行「働く女性の姿に見る愛知・名古屋の課題～『なでしこ』不在 都市の活力に影響も～」(2014) [http://www.dbj.jp/pdf/investigate/area/tokai/pdf\\_all/tokai1406\\_01.pdf](http://www.dbj.jp/pdf/investigate/area/tokai/pdf_all/tokai1406_01.pdf) (2017年2月参照)

木全真希・鳥飼尚史・西村梨佐・藤田真由・前原里帆・道下光昭



### PROFILE プロフィール

名古屋市立大学総合情報センターに勤務。各キャンパスの4分館(図書館)を経て現在、山の畑分館の分館主任をつとめる。3児の母。

### 大学図書館員として働く

短大で司書の資格を取り、名古屋市に司書職採用され名古屋市立大学に配属された岩佐さん。現在は分館主任として、山の畑分館のまとめ役をしている。大学図書館のサービスは、教員や学生といった特定の利用者を主な対象としているため公共図書館とは異なる部分も多い。従来の紙の学術雑誌にかわる海外電子ジャーナルの契約や管理など、採用当時には考えられなかった業務に多くの時間を割いている。また、学生にとって図書館がよりよい学習スペースになるような環境作りも大切である。「大学の主役は研究者である教員や、学生の皆さんです。さまざまなご要望に出来る限りお応えできるよう、職員一同が心がけています。」

### 仕事と家事・育児

岩佐さんは高校生・中学生・小学生の3人の子どもの持つ母親でもある。1999年の最初の出産の時から毎回育休を取得、子どもが幼い時期は保育園を利用して働き続けた。印象的だったのは、岩佐さんは家庭と職場でスイッチを無意識に切り替えているということだ。「子どもが3人もいると子ども中心の生活になりがちですが、仕事と家庭の両方を常に気にしていると自分がパンクします。働く母親には、それぞれの場に瞬時に対応できる切替スイッチが自然に備わるのでは。」という。3人の子どもの存在は岩佐さんの日々の喜びである一方、一人の時間が持てない

という事実もあるが、「職場」は一人として社会に参加できる大切な場所だと考えている。日々の忙しさやトラブルも多いが、年を経るごとに職場と家庭の両方で楽しみを見いだせるようになってきたそうだ。

### 今後のワーク・ライフ・バランス

仕事の面では、大学図書館をとりまく状況が激変し、その存在意義がゆらいでいることを危惧している。大学内外の変化を見きわめ、図書館はもっと外向きに発信することを求められており、利用者にいつも頼りにされる大学図書館を目指したいと考えている。また、自身が働く母として長年職場の理解・協力を受けてきた立場から、次世代の、特に子育て中の母親が安心して働ける職場を守っていく責任を感じているという。私生活では、わが子と「じっくり遊ぶ」という経験をやり残した分、将来は何か子ども達とふれ合えるような活動がしたいそうだ。上の子2人の受験が落ち着いたら、ゆっくりとした日程で旅行に行くのも夢と語ってくれた。

## INTERVIEW 03

総合情報センター  
岩佐 多実子 さん  
Tamiko Iwasa



本の修復も大切な業務のひとつ。



カウンター業務の様子。

職場は、一個人として社会に参加できる大切な場所。



INTERVIEW

04

大学病院 薬剤部  
上野 朋子 さん

Tomoko Ueno



PROFILE  
プロフィール

名古屋市立大学病院の薬剤部に勤務。主な業務は、調剤と服薬指導。3児の母。

薬剤師としてのやりがい

上野さんが行っている調剤は、患者さんのお薬を用意する段階までの仕事であり、医師からオーダーされた処方や実際の投与量が間違っていないかなど、様々なことを確認する。常にミスなく、迅速に仕事ができるように心がけている。患者さんにお薬を直接渡す場合もそうでない場合も、患者さんの顔を想像し、「ひと」を意識している。また、患者さんに薬の飲み方を説明する服薬指導では、自身の妊娠と出産の経験を活かし、そのような目線から患者さんに対応できることにやりがいを感じている。

子どもとの時間

仕事以外の時間は、「基本的に子どもと過ごしています。平日は保育園に迎えに行き、夕食、勉強や習い事の手伝い、食事、一緒にお風呂に入ったり、あまりゆっくりできないですが、その中で子どもと毎日の出来事を話するようにしています。」平日に子どもと遊ぶことはあまりできない代わりに、休みの土日に一緒に出かけるそうだ。また、「日々の生活を通じて子ども達に教わることもとても多い。」と話してくれた。

仕事と生活の両立のコツ

育休を3人の子どものために各々1~2年取得。育休取得に対して、職場内で否定的な反応は無かったとのことである。また、月に数回ある当直

などで家にいられないときは、夫が子どもの面倒を見ている。夫と家事の分担は、仕事の復帰前に話し合いをし、ある程度決めているが、状況に応じて自然に決まる部分もあり、暗黙の了解の上で協力し合っている。また、仕事の時間が自分一人の時間でもあるため、気持ちの切り替えをしっかりと行い、家では仕事のことはあまり考えないようにしている。

自分の信念に一生懸命に

家庭での自由な時間は多くはないが、職場は、自身のことを一人の母ではなく、一人の薬剤師としてみてくれる環境であるため、仕事の時間は大切にしたい、と話してくれた。

晩婚化が進んでいるといわれる近頃だが、子どもを持ちながらでもやりたいことはやれると上野さんは話す。「これからの若者も、結婚や就職などによって状況が変化することがあっても、ぶれることなく自分の信念に一生懸命に向かっているってほしいです。」と話してくれた。現在、上野さんはさらなるスキルアップのために資格取得に向けて邁進している。



外来患者にお薬を渡す業務。



調剤の様子。

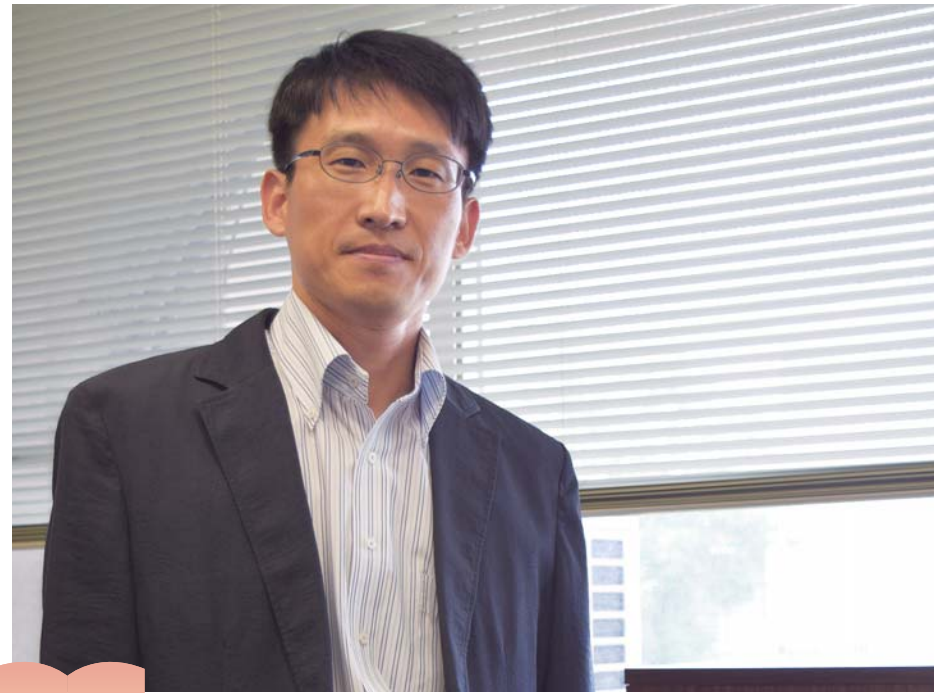
INTERVIEW

05

大学院 芸術工学研究科(建築都市領域)  
尹 奎英 さん

Gyuyoung Yoon

大学院 芸術工学研究科(建築都市領域) 准教授



PROFILE  
プロフィール

韓国生まれ。大学卒業後、2000年来日。2010年より名古屋市立大学大学院芸術工学研究科(建築都市領域)にて准教授として勤務。2児の父。

研究とやりがい

尹さんは機械や空調などの建築設備が専門で、省エネ・創エネを主な研究テーマとしている。韓国の大学を卒業後、日本の環境共生、共生建築に興味を持ち留学した。「今、世の中で求められている『省エネ・創エネ』というテーマはやりがいのある仕事です。もっと社会に貢献できる成果を出さないといけない。」と日々研究に取り組んでいる。

夫婦と子ども  
みんなで乗り切る

子どもは中学生と小学生。両親が近くにおらず子育ての頼りにできない。妻も大学の非常勤講師として仕事をしている。子どもの世話は夫婦の協力体制が欠かせない。「仕事と子育てのその空白を夫婦二人で効率を上げて、やっていく。そういう毎日の連続ですね。」と語る。「今が一番大変です。限られた時間の中でやるべき仕事をこなすために効率的に仕事を進めることを心がけています。週末にもちょっと準備をしたり資料を集めたり、仕事の依頼をかけた。あと、早起きして、朝の時間帯をよく使っています。夏休みなどは子ども達が家にいる時間が長くなりますね。1週間前に仕事の予定がだいたいわかることが多いので、どうするかというのを、夫婦で相談します。どうにもならなかったら、名古屋市のトワイライトスクールや友人に頼んだりすることも。トワ

イライトスクールは本当に助けになりますね。」また、子ども達に対しては、「親が大変だからこうしなきゃ」という言い方ではなく、「こういう状況にいるから、がんばろうね」という声かけをする。「お母さんも仕事があるし、お父さんも仕事があるから、ここは乗り切ろうね」というニュアンスです。」家事の分担などは夫婦間で細かいことは決めず、必要に応じて相談して決めている。子どもの身の回りの世話は妻が担当、力を使う仕事を尹さんが担当することが多い。「今ここ大変だからちょっとここやってくれ」というのと、できることを分けてやるという感じですね。」

今後の  
ワーク・ライフ・バランス

尹さんは、「子ども達が成長したら、今度は夫婦同士の時間が増やせるはずなので、その時間を有意義に過ごすためにどうすればよいか夫婦二人で話し合いながら計画を立てたいと思います。」と語る。また、子ども達が親になったときにどのような子育て支援ができるかを考えている。教育への意気込みも話す。「建築を学んで機械の設計をする人はまだまだ少なく、多くの人材を輩出したいと考えています。また、もっと女性の活躍できる場はあると思う。その備えとして、もっと大学院で勉強してほしいというのが私の願いです。」



尹先生が実行委員を務める「なごや環境大学」のガイドブックを見せていただきました。



INTERVIEW

06

大学院 薬学研究科 講師  
**築地 仁美** さん

Hiromi Tsuji



PROFILE  
プロフィール

名古屋市立大学大学院薬学研究科講師。専門分野はアルツハイマー病や筋萎縮性側索硬化症(ALS)の治療薬の開発のための研究。3児の母。

趣味は育児

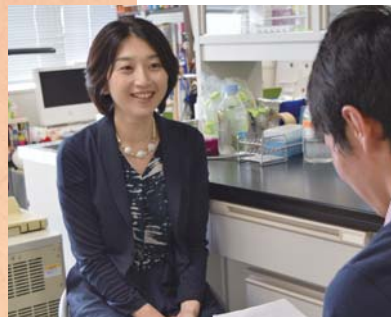
築地さんは「現在夫が単身赴任で、子どもが3人います。だから仕事以外の時間は育児、家庭にあてていて、趣味を持つ余裕はないんです。むしろ、若いころは育児が趣味ですって答えていました。」と話を始めた。父母会長もつとめ楽しみながら育児に取り組んでいる築地さんは続けて、「子育てでストレスをためちゃったらすごくつらいと思うんです。私は子育てが好きなので、子どもと関わっているだけでストレス発散になる。だから遊びも子どもと一緒にできることしかやらない。例えばスキーとか映画鑑賞とかですね。」でも「自分のアイデンティティを保つために一人の時間も大事。」と話してくれた。

自信と勇気を与えてくれたお母さん

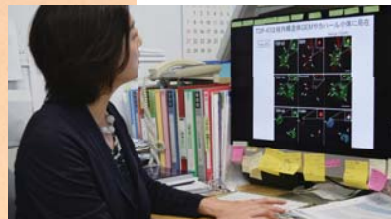
築地さんは「母が3人の子供を持つ大学の教員だったんです。そういう環境で育ったので、自分でもできるかなって思ったんです。」と話しており、身近にお手本となる存在がいたことが自分も仕事と子育てを両立できるという自信につながっていた。また、「うちの場合は、私が名古屋に来る少し前に、母が大学を退官になったんです。だから、母が『私が手伝うから、日本中どこに行ってもいいよ』って言ってくれたんですね。」と話していた。お母さんがいなければ、自分はやりたい研究ができる名古屋に来て、夫は単身赴任という選択をする勇気を持てなかったという。

仕事と家庭の切り替えが大事

築地さんは、仕事と育児の両立のために大切なこととして、母親モードである自分から仕事モードである自分にきっぱりと切り替えることを挙げていた。「平日は9時から19時ぐらいまで働いて、土曜日は半日ぐらい働きます。子どもと一緒にいてくることもあります。研究室に空いている机があるので子どもはそこで勉強し、私は仕事しています。モードの切り替えがうまくいけば、子どもが職場にいても仕事に集中できますし、家でも仕事ができます。完全に仕事モードなのは平日の昼間であって、土日は素の自分で両方こなしています。」と語っていた。さらに、「母親なので、朝、今日一日を子どもはどう過ごすんだろうと子どものことを考えますが、出勤すれば仕事のことだけを考える。いろんな世界に属しているいろいろな事を同時にやらなきゃいけないので、切り替えができないと大変ですね。あとは効率よくこなすことと集中力が大事です。私の夢はよい研究をし、キャリアも積んで、子育てもするってたくさんあるので、仕事するときは仕事だけを考えるって強い意志をもって切り分け、集中してこなすようにしています。」と話してくれた。



研究室でお話を伺いました。土曜にお仕事をされる際はお子さんが一緒に来ることも。



研究内容のプレゼン資料作り。

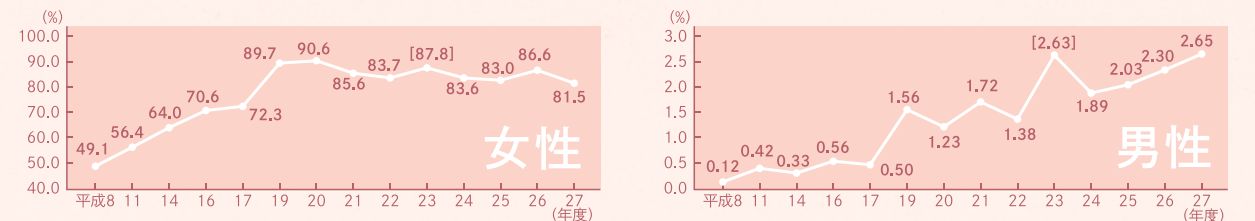
COLUMN

職場における理解 ～マタハラ・パタハラ～

マタニティ・ハラスメント(マタハラ)とは、職場において妊娠・出産する女性に対して嫌がらせをすることである。具体的には上司に育児休業の取得を申請したところ、「あなたが休む間、代わりの人を採用しなければならぬし、あなたも出産後復帰するのは大変でしょう?」などと言われ、辞めざるを得ないといったハラスメントである。一方、男性社員の育児取得や育児のための時短勤務を妨げるパタニティ・ハラスメント(パタハラ)もある。パタハラの事例としては育児休業の取得を申請したところ、上司から「出世に影響するが

いいか?」と言われ育休を諦める、育休取得は認められたがその後重要なプロジェクトから外されたというものがある。近年、女性の育休取得率は高い水準を維持しているが、男性の取得率は2%程度と依然として低い。男性の取得率が上がらない原因の一つとして、上記のパタハラがあると考えられる。マタハラだけでなくパタハラについても企業内および社会全体における意識を高め、男女共に育児と仕事を両立できるような職場環境をつくっていくことが大切である。

●育児休業取得率の推移 注:平成23年度の[ ]内の割合は、岩手県、宮城県及び福島県を除く全国の結果。



〈出典〉厚生労働省「平成27年度雇用均等基本調査」 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/71-27-03.pdf> (2017年2月参照)

磯谷尚・伊藤加奈・北村早希・三島由梨乃・和久田真希

名古屋市の有配偶女性の就業と夫の家事貢献

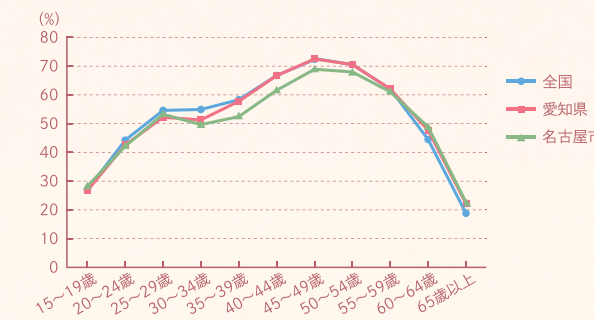
名古屋市は既婚女性の就業が他の地域と比較して活発でないと言われている。

図1は有配偶女性の年齢階級別労働力率を全国、愛知県、名古屋市についてみたものである。名古屋市は20代後半から50代前半までの有配偶女性の労働供給が非常に低い水準にある。例えば、30～34歳では全国55.1%、愛知51.3%、名古屋市50.0%、35～39歳では全国58.5%、愛知57.8%、名古屋市52.8%と全国と比較して約5～6ポイント低くなっている。愛知県の有配偶女性も30代前半で一度低下するが、30代後半には全国水準に戻っている。名古屋市では一度労働市場から退出した後、復帰までの期間が長いことが推察される。

既婚女性の就業が進まない要因として、本人の希望もあれば、保育所に子どもを預けることができなかった、職場の理解がな

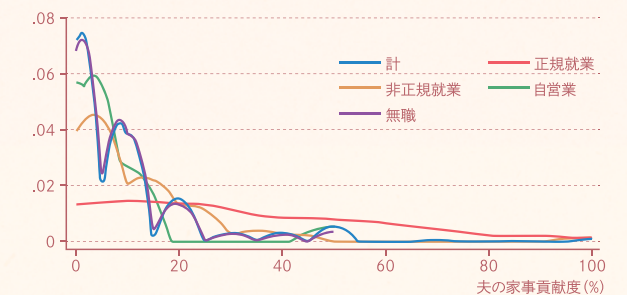
かったことなど様々なことが考えられる。その中の1つは家庭における家事や育児の支援が得られないために、就業すると仕事と子育て、家事のすべてを女性が担わなければならないという現状である。図2は名古屋市の有配偶有子女女性の就業形態別でみた第1子が5歳頃の夫の家事貢献度(家事を100とした時の夫の家事負担の割合)の分布である。正規就業で働いている場合、夫の家事貢献度は0から100まで幅広く分布しているが、それ以外の就業については貢献度が20までに偏っている。言い換えると、夫が家事により貢献できるような働き方をしている者でないと妻が正規就業をすることは難しい。女性の社会進出を考える場合、女性に対する支援に注目されがちであるが、配偶者である男性の働き方支援も同様に重要である。

図1 ●有配偶女性の年齢階級別労働力率



〈出所〉総務省「平成22年国勢調査」より筆者作成

図2 ●夫の家事貢献度の分布(カーネル密度推定量)



〈出所〉「名古屋市お子様に関する調査」(2016年3月実施)より筆者作成

山本陽子